

福島区歴史研究会 会報

第十一号

2018.9

目次

会長に就任して・・・・・・・・・・末廣 訂	I
福島区内の「長屋」についての所見と現状	
長屋戸(軒)数調査・・・・・・・・岡倉光男	2
パナソニックの新ミュージアム見学記・・・・・・・・末廣 訂	9
国道二号淀川大橋改修工事の見学と	
海老江の歴史・・・・・・・・末廣 訂	11
浦江マチ歩きの栞―平成三〇年第一回	
福島区歴史研究会セミナー報告―西 保國	15
野田福島の戦いとその意義―平成三〇年第二回	
福島区歴史研究会セミナー報告―服部静尚	17
福島区歴史研究会 会則・・・・・・・・・・	18
福島区歴史研究会 役員名簿・・・・・・・・・・	19
上半期の事業・上半期の活動記録・・・・・・・・	20



会長に就任して

会長 末廣 訂

今年二月の総会で、会長に推薦されお受けした。昨年一二月の役員会で岡倉会長代行が健康上の都合で、遠慮したいとの意向を表明され話し合いを続けてきた。

昨年四月に太田勝義会長が亡くなられ、岡倉副会長に代行をお願いし、引き続き会長をしていたくものと思っていたが残念である。

会報担当の西村さんから、総会で新任挨拶の時間がなかったので、抱負等を書いてほしいと頼まれた。幹事長(事務局長)を約十年近く担当したので特別に新しい抱負などはないが、二・三、日ごろ思っていることを述べてみたい。

一つ目は歴代会長が努力され、この福島区歴史研究会を育てあげてこられたご尽力に深く感謝申しあげます。この会も早や三十五周年を迎え、その間、会員数も五〇名を超える大所帯になった。また、今回の総会で新しく役員になっていただいた方と一緒に会を盛り立てていきたい。

二つ目は、会の活動内容が従来は故井形事務局長が個人的に努力して収集された資料の展示や戦争体験を話す講演会が中心であったが、最近では会員全員が参加し、担当を決めて活動する会に代わってきたことである。毎月第三木曜日の月例会の開催、展示は会員が作成した内容に変えた。会報発行やホームページの開設、セミナー新設、そして、担当部会と地域担当制による行事や連絡網の充実である。三〇周年には記念誌『なにわ福島ものがたり』も発行できた。今後はさらに内容

を充実させ、新しい行事も考えていきたい。

三つ目は、各地域文化や歴史の深堀と同時に他地域（他の区）の歴史愛好会等との交流会である。先般、福島・上福島地区の会員が主体となって『「福島村」小さな小さな歴史まち歩き』というガイドブックを発行された。この小冊子には福島地区の歴史・文化・ゆかりの人々・神社やお寺・街の風景等を地図に明示し、ふるさとの香りが残る案内本である。

この小冊子発行を機会に他の地区も同様の案内本や「福島区内の今昔写真集」を是非発行してみたい。

また、先般、なにわの宮リレーウォーク実行委員会の依頼により「大和田街道・八十島と古戦場をめぐる街道」ガイドのお手伝いをしたが、この委員会には十二の団体があり、シリーズで旧街道を案内され、当会として初めて交流し、よい経験をした。

また、最近では「野田・福島の戦いの中心人物・三好長慶」関連で四国や堺市、大東市等の三好長慶の会との交流を始めており、よき経験をしつつある。浦江塾への参加や古田史学の会、伊丹の荒木村重会、また、セミナー講師との交流等、今後ともこのような経験を続けてゆきたい。

会員の平均年齢を調べたわけではないが、決して若い世代の会ではない。少しでも興味のある企画や行事ができ、区役所・図書館や地元の方の協力を得ながら今後とも地道な活動を続けていきたいと思う。どうぞよろしく願います。

福島区内の「長屋」についての所見と

現状長屋戸（軒）数調査

岡倉光男

近年、かつて都市型町家住居の典型であった「長屋」が、その老朽化、耐用年数の限度越えと使い勝手の不便さもあって、ここかしこ撤去されて、耐震・耐火建築の一戸（多くは三階建）建てに替わっている。

明治一九年（一八八六）に制定された大阪府「長屋建築規則」によれば、「第一条、二戸以上を一棟となし新設するもの」とあり。次いで同四二年（一九〇九）には北区の大火がきっかけで「建築取締規則」が公布され、「第七条、長屋と称するは二戸以上連続する建物をいう」とあり、上下別々の住居である文化住宅、各部屋が並び区切られたアパートと等しく、集合住宅の一つの形態である。これら木造長屋に関する種々の細則が定められ、昭和一二年（一九三七）頃から戦時体制の強化により、外壁をモルタルやタイルなどで被覆する「防火改修」などがとられた。

昭和一六年（一九四一）の大阪市の住宅調査では、六一万余で、所有別で見ると、九割程度が貸家である。しかも、同一五年（一九四〇）の貸家調査では総戸数の実に九五%が長屋建てだった。

当時、大阪市は、長屋都市ともいえる都会であった。

昭和一八年四月一日、戦争激化をたどるなかで、福島区が誕生した。区制発足時の人口は、一四七、四六〇人。

太平洋戦争末期、昭和十九年から二〇年にかけて、大阪には米軍は五〇回以上来襲。一〇〇機以上による空襲は「大阪大空襲」と呼ばれ、同二〇年三月一三〜一四日から終戦の前日まで計八回に及んだ。死者行方不明者は約一五、〇〇〇人とされる。

同二〇年の福島区の主な空襲は、次の通り。

三月一三日(夜) 中央卸売市場・堂島大橋北詰・海老江

六月一日(昼) 福島・玉川・野田・吉野・大開・鷺洲

六月七日(昼) 福島・鷺洲・海老江

六月一五日(昼) 福島・鷺洲・吉野・玉川・海老江

六月二六日(昼) 海老江・(二トン爆弾五発被爆)・鷺洲・大開・含淀川大橋

七月一〇日(昼) 鷺洲・福島・玉川

以上、大量油脂焼夷弾無差別爆撃を受け、マグネシウムや黄燐の焼夷弾も混投。

区内、戦災世帯の総数は、五、三七八世帯、一三、六二五人。(昭和二〇年一〇月五日調査)

浪速区や西区・港区は空襲により殆んど丸焼けになったが、福島区内でも、当時新家といった吉野五丁目や海老江三丁目はじめ全ての地域が空襲被害を受け、その他、昭和一八年末から同二〇年六月にかけて、主に各線路脇が多かったが、幅一五メートル以上、場所によっては一〇メートルまでを防火類焼止めのため、更地にする建物強制疎開、戦後には、なにわ筋・新なにわ筋等道路工事による撤去(玉川地区だけで、約五〇〇世帯)など、戦災以外でも多くの長屋が次々に壊された。

戦前、瓦屋根累々の長屋都市であった大阪市内に、管見だが戦後、木造土壁の長屋新築が一棟もない。

そして冒頭に記したように、ここ何年か長屋建が壊されているのに、行き合うことがとみに多い。例えば、福島・上福島地区では、地元住人の方が今から三〇年前には、おそらく倍の戸数があったと思われる感想を述べられている。しかし肝心の分母に当たる実数が分からない。実数が把握出来れば、減り方の傾斜から将来、無くなるだろう年月の予測が凡そでも、推し測ることが可能となる。

長屋家屋への想いと、衰退に向かう一抹の寂しさもあって、昨年から今年(平成二九〜三〇)にかけて、当会会員の協力のもとに、区内の長屋戸(軒)数を把握する為、実状調査を行った。片側又は両側が切られて一戸建てになっている元長屋も数えた。外側が改修されて良く分からない家屋があり、公表までの日にち差もあるので、一〜二%の誤差があるかも知れない。

所帯数は平成二七年三月末日のもので、一戸が一世帯とは限らないが、現下では限りなく近いので、住居中の長屋が占める比例割合の参考までに記載した。



吉野2丁目 近日全戸空家になるらしい

町名	居住戸数	空家 (含倉庫)	所帯数	町名	居住戸数	空家 (含倉庫)	所帯数
福島1丁目	42	2	742	大開1丁目	111	9	926
福島2丁目	59	3	511	大開2丁目	86	9	1198
福島3丁目	49	7	1374	大開3丁目	2	0	1285
福島4丁目	51	5	1597	大開4丁目	0	0	889
福島5丁目	63	6	628	小計	199	18	4298
福島6丁目	11	2	1535	鷺洲1丁目	51	16	815
福島7丁目	0	0	1295	鷺洲2丁目	10	1	952
福島8丁目	108	6	760	鷺洲3丁目	31	22	2231
小計	383	31	8442	鷺洲4丁目	41	7	468
玉川1丁目	2	0	1269	鷺洲5丁目	2	0	901
玉川2丁目	8	0	1193	鷺洲6丁目	0	0	518
玉川3丁目	30	2	475	小計	135	46	5885
玉川4丁目	28	3	832	海老江1丁目	42	4	1062
小計	68	5	3769	海老江2丁目	67	12	1088
野田1丁目	0	0	0	海老江3丁目	40	5	699
野田2丁目	217	14	961	海老江4丁目	46	17	424
野田3丁目	74	7	663	海老江5丁目	0	0	493
野田4丁目	42	8	173	海老江6丁目	2	1	220
野田5丁目	268	26	867	海老江7丁目	147	63	1266
野田6丁目	9	0	1041	海老江8丁目	68	33	785
小計	610	55	3705	小計	412	135	6037
吉野1丁目	82	19	1149	総合計	2034	378	37534
吉野2丁目	18	20	599				
吉野3丁目	87	42	1218				
吉野4丁目	40	4	1472				
吉野5丁目	0	3	960				
小計	227	88	5398				

上記「長屋」戸数調査員〈敬称略〉
 大垣禎秀・荻田善彦・岡倉光男
 林俊二・西保國・水谷浩一
 末廣 訂・大平雄喜・大平幸子



福島8丁目



玉川4丁目



野田5丁目



大開1丁目



現在、福島区内の住居に占める長屋建ては、全戸数の五、四二%で一八戸強に一戸の割合になっている。一瞥して、吉野二・三丁目、鷺洲三丁目、海老江七・八丁目は、特別に空き家が多い。

区内の人口は全国的に減少の中、増えつつあり、平成二七年三月末日、七〇、五五一人、同じ年の国勢調査では、七二、四八四人、今年 \parallel 平成三〇年七月一日の推計人口、七五、二三人、世帯数三九、八八六、核家族化と高齢化が進む中、平均一世帯構成員数は一・八九人。

今、手許に『大阪新・長屋暮らしのすすめ』（橋爪紳也編 創元社二〇〇四年刊 口絵・本文共一五四頁）がある。長屋建築についての特徴、時代による変化と暮らし、路地（ロオジ）までもが網羅されて

いて一一名の著者が、それぞれの思いと考えを書かれています。

それらの各項目中、「長屋再生建築術」とそれと関連した「野田」地域の取り組み、他、今まで殆んど知られていない事象について紹介したい。

中央区谷町六丁目と七丁目の境界にある、はいからぼり（空堀商店街）界隈や北区中崎町に代表される町家に、震災から免れた長屋を再生しリノベーションが有志によって試みられた。当該地を訪れられた方も、おられると思う。

リノベーションとは、住居を商店や集客を図る用途に変更し、価値を高め、より良く作り替えるという目的で改装することをいう。

今から約一八年前、複数建築家の主唱で「はいから俱樂部」を設立。メンバーは当初四〇数名、昔ながらの町並みを保存・再生し活力を生み出すことを目指して様々な活動を始めた。イベント「はいからまちアート展」開催では、まちの魅力発信と地元の人達から共感を得、次いでフランス料理店のテナント誘致、二年目には、長屋再生複合ショップとして二軒の長屋内部を五店舗に改築、テナントを入れた。複合店を「惣」とネーミング、続いて「練」を実現した。

また直木三十五記念館とショップ「萌」^{もえ}を開設、運営母体を別人とし、そこから家賃を頂いている。

実は「はいから俱樂部」の活動と同じ頃、長屋が多く残る福島区野田地域でもいろんな活動、試みがなされた。

これも手許に、有志の方から頂いた、A3版両面刷り二頁の「会報」一〇二三号（七号より題字「のだ藤」）がある。「野田のまちづくりを

考える会」発行。第二代会長に藪本多恵子（娘さんは女優・紅萬子）・実行委員長、村上栄男（故人）。役員に野田の全町会各会長を主体に二〇名。平成一〇年一〇月、大阪市長宛て「町づくり推進団体認定申請書」を提出。同一年一月、「専門家派遣決定」「助成金交付決定通知書」交付を受ける。

全住民対象に「住まいと町づくりに関する」アンケートを実施。回収率六九・三％。一、五九八世帯の回答を得た。

以下アンケート項目の主なもの。居住意向Ⅱ「野田に住み続けたい」。一、一五四人（七二・二％）。理由として交通機関が便利。（七七％）。近所の人と親しく連帯感がある（三九％）。買い物に便利（三三・四％）。

「他の地域に移りたい」。理由Ⅱ騒音・公害など住環境が良くない。公園や緑などの自然環境が悪い。所有形態Ⅱ「持ち家率」（六七・五％）。「借家率」（二五・五％）残り七％は土地のみ借地。今後目指すまちづくりⅡ「世代を超えて楽しく暮らせる。防災など安心して暮らせる。生活関連施設と住まいとの調和した住みやすさ。健康福祉の充実した人にやさしい」町と続く。

平成一三年末、「住環境部会」と「魅力づくり部会」の専門部会を設置。

《まちづくりコンサルタント》㈱PPI計画・設計研究所 代表者 三好庸隆氏他からの助言と野田地域と似た、門真市末広南地区や東京都世田谷区の「まちづくり活動」の例と住民提案型の活動について説明を受ける。

野田まちづくり憲章を制定（平成一四年九月）
一、高齢者から子供まで多世代が生き生きと暮らせるまちづくりをめ

致します。

- 二、だれもが安全に歩ける道づくりをめざします。
 - 三、花とみどりが豊かなまちづくりをめざします。
 - 四、まちにあるお地藏様など歴史のよさを活かします。
 - 五、となり近所とのコミュニケーションを一層心がけます。
 - 六、災害に強く安心して暮らせるまちづくりをめざします。
- 以上を、今後のまちづくり活動の指針とする。

会報を読んでいて、住民の総意としての熱気や「考える会」の活動が「のだ藤」紙面から伝わってくる。ターレット（荷物運搬車）や許可された以外の車の通行禁止、清掃による町の環境改善等々の成果が上がり、手許の二三号（平成一五年七月発行）では、それまでの意見をまとめ、抜粋されて、以前の様子として二五篇の思い出が書かれ。提案、望む事として四一案件が紹介されている。

すべて尤もな事ばかりであるが、「以前の様子」として二「まち全体が細い路地と長屋でできている」とあり。「提案」として、昭和三年に大野町通り商店街から名を野田商店会と改めた東西三五〇以南北（妙見・金光筋）約二〇〇以上の「野田商店街を昔のような、活力ある商店街にしたい。」は、その後の現実は厳しく八年後、平成二三年三月、四〇店舗中、多くの店が立ち行かなくなり、組織としての商店街は解散して無くなった。また後を追うように、往年の西野田公設市場、改名して、気ララ野田も廃業・閉鎖した。

七〇年程前、戦後の中央卸売市場には、市内府下一円はもとより、遠くは泊り掛けで丹波篠山辺りからも、買出し人が来場。仲買・小売

商人以外の運送を含む関連商や事務方も入場の許可鑑札を得て、約二万の人が出入りしていた。買出し人の多くは、コマの付いたブリキ缶箱を肩に、或いは大人車を引いたり、また当時貴重品の自転車で乗りつけ、早朝広い構内が混雑していた。休場日は月三日、八の付く日だけだった。

野田の町と、その周辺、玉川・吉野地域は市場内仲買卸人と会社・付属売店等、関係者の住居が多くあり、活気に満ちていた。その後、商売伸張で余裕の出来た人達は、長屋住まいから一戸建てに建替え、又は郊外など遠くに住居を移し、車で通う人達が増えた。

昭和三九年、東部市場が出来、五三年、北部にも出来た。六〇年には貨物列車や暫くして船便も無くなり、集荷はトラック便による陸送だけになり、近年は、流通形態が大きく変化、小売店と産地の産直取引が増え、一六年前、市場構内の全面建て替えが折角完成したのに、本場は従来程の活力は無い。中央卸売市場の繁栄と野田の町家の活気には少なからず相関性があり、住民の願いに反して、大勢の動きには如何ともし難いようだ。

町おこし、まちづくりの為に、多くの人が関心を持って野田地域の「考える会」に多数参加された。五年に亘って「会報」も発行され、多くの提案・希望がまとめられ、専門家や自治体の協力も得た。しかし個人では、当然ながら出来る事と出来ない事があり、大手のデパートや資本を出し合った運営母体でないと目立った人寄せの町改造は実現出来ず、住民の思いは強くとも、日々の地道な行いの隣近所との挨拶から始める「コミュニティ」づくりの中で「住み易さ」を求めて、何時までも終わりなく続けて行くしかないようだ。

土地柄は「野田村」と揶揄されることもあるが、現在、交通機関の便利さもあり、移動手段としての自転車利用で、生活行動半径が拡がり、野田の人達も吉野や玉川地域も日常の生活圏で、図書館・区役所・食料はじめ日用品の買い物・コンビニ・宗教施設・病院・大公園などが、容易に利用・活用出来る領域にある事で、「暮らし易さ」は以前より格段に増している。

勿論、他のブロックも同じで、福島区内人口が増す大きな原因の一つである。

実のところ筆者（私）は、長屋生まれの長屋育ちで、北区（当時は東淀川区）の豊崎で四軒長屋の端の町家で生まれ、二階は父が職人さんと働いていたメリヤスの横織機が五台あり、階下は土間の炊事場と畳の部屋が二間、奥の縁側の先は単に「せんざい」と言っていた裏前裁、左手が廁だった。今では考えられないだろうが、水道の蛇口が向いの四軒、計八軒で一つしかなかった。朝、顔を洗う為に、洗面器を持って、表に出て二軒隣の水道端まで行き歯磨きをしてから洗うのだが、近所の方々の挨拶がかかせない。雨の日は母親がバケツに水を入れ家の炊事場に取り置きしてくれていた。

昭和一九年秋、出征していた父親が病気の為内地送還、除隊復員して福島区に引越した。中央卸売市場の表出入口に近い、船津橋から野田阪神前に至る、市電通りに面した二階建て四軒長屋の一軒で、新聞販売出張所責任者であった。左隣は食堂で、一階隣りとの壁の一部をくり抜いて棚が作られ、そこに時局柄入手難なラジオが置かれていた。共同で聞いていたが、穴の側での物音や人の声は筒抜けであった。

本会『会報第九号』に、野田地域の長屋について書いた（野田地区の長屋現状数と民俗点描）際にも触れたが、隣近所、肩を寄せ合って生活を営んでいる。構造上太い梁が長屋の建物を貫き支え寄せ合っているように、ふれあいと助け合いが育つ町になる。それ故もあって、路地にも自ずと世話好きな人が出て、人情を醸し、温もり・優しさ・和やかさを今に留めている。

大事にしたいコミュニティが、レトロ感の中で生まれ易いのであるうかと思う。

便利さよりも大切なものが通う生活が、「暮らし良い」町の贅沢と言える。

参考文献

- 『戦争を語りつぐ一九九九』大阪市立福島図書館・福島区歴史研究会 二〇〇〇
- 『福島区史』一九九三
- 『野田創立一〇〇周年記念誌』大阪市立野田小学校 二〇〇三
- 『大阪のひきだし』鹿島出版会 二〇〇六

古い写真を探しています

お手元のアルバムに

災害や今はない建物などが写っているものがあれば

ご提供ください

パナソニックの新ミュージアム見学記

末廣 訂

見学日 平成三〇年四月五日（木）

参加者 一三名

訪問先 パナソニックミュージアム・さくら広場・松心会館

一、パナソニック創業百年と新しいミュージアム

今年には松下幸之助翁が大開で創業して百年になる。これを記念してパナソニック社は創業の日にあたる三月七日に門真市。パナソニック社内にある旧松下電器歴史館を新装し、新しくできたパナソニックミュージアムの開所式をしたと新聞等に出ていた。

この機会に会員で新ミュージアムを訪問し、その後、さくらの花見懇親会をしてはと、提案があり、一三名が見学に行った。

四月五日（木）京阪電車・西三荘駅に朝九時四五分集合。ところが、会員一名が時間になっても来ないので、携帯電話をかけたが出ない。二・三度かけてやっと出たところ、いま同窓会で京都に来ているとのこと、無事を確認したので、ミュージアムに向かった。

開館して一カ月しかたっていないのか、大勢の人が館前に居り、新入社員の研修生を乗せた大型バスが二・三台は入ってきた。入場は無料だが、十名以上の団体は事前申込みがある。

館内の玄関口でも入館者で一杯。昭和三六年入社の子団が見学に来

ており、知っている先輩に聞くと午後同期入社の子団を開くと言っておられた。

旧松下電器の本社（大開から門真に移転した時の第三次本店）を従来から「松下電器歴史館」として利用していたが、今回はおなじ形の建物をもう一棟建て、一棟目を「松下幸之助歴史館」もう一棟を「ものづくりイズム館」としてオープンした。

歴史館は松下幸之助が生まれ育った和歌山の実家の紹介、大開の借家を改造して工場を始めたところの「創業の家」の様子を復元、そして松下幸之助関連の著書やグッズの展示、「経営の神様」と呼ばれた翁の言葉を映像やパネルにして紹介している。

その後、二棟目の「ものづくりイズム館」を訪問した。ここは創業以来の家電製品、特に常に新しい文化を創造するものづくりのスピリット、歴代製品の膨大な展示で圧倒される。

パナソニックのものづくりのDNAを探る場所でもある。

両方の展示室をジックリ見学すると二・三時間は直ぐにたつてしまいうそである。これから企業を起こす人、会社経営等を勉強する方には、おすすめのミュージアムと思う。ただOBの一人として「会社の創業百年」の歴史を展示しているものの、会社の歴代の出来事、社名変更・国内・海外事業の変遷やスポーツ活動を含む幅広い紹介等が少なく、少し寂しく思った。

我々は見学後、欲張つてとなりの松下幸之助旧宅跡の「さくら広場」を探索するも、すでに桜はほとんど散っていたが、雰囲気だけは楽しめた。

一二時半にパナソニックの厚生施設である松心会館で食事の予約

をしていたので、しかも西三荘から一駅先の門真駅まで歩いていくので、少し早めにさくら広場をあとにした。

一駅歩くには少し遠いので、岡倉顧問が電車で行くのだと、西三荘で別れた。二〇分ほど団体で歩き、京阪門真駅で当然先に着いて待っているはずの岡倉さんが来ていない。何人もが駅周辺を探したが見つからず、家に電話をして、予約時間ギリギリに会館に着いた。

松心会館二階の個室で、食事を始めたころ、岡倉さんが無事到着され、お聞きするとモノレール門真駅広場で待っていたとのこと。無事到着でホッとした。

事前に注文していた「おつくり定食」を美味しくいただき、全員楽しい時間を過ごした。

二、松下幸之助翁と地元福島区歴史研究会

我々歴史研究会は四・五年間隔で「松下幸之助」展を開催している。今年「道」は続く―松下幸之助創業百年―を三月から六月にかけて福島図書館郷土資料展示室で、一〇月から翌三月にかけて福島区役所で展示会を開催。

また、最近では、昨年一月、西野田工科高校で「松下幸之助」展をした。これはこの数年、西野田工科高校の文化祭で教室を借り、展示をしているものである。

最近の学生たちのどうか、若い世代の人に大変残念だが、「松下幸之助」の名前を知らないという時代の流れを感じる。我々会員が展示場に学生を呼び込むのに、非常に努力がいるし、仮に生徒が展示場

に入ってきてても、松下幸之助って誰ですかと、反対に質問されることが多い。

四年前に松下電器産業の元社長で特別顧問の谷井昭雄氏をお呼びして福島区民センターで「松下幸之助生誕百二十年・創業の地碑建立十周年記念講演会」を開催し大変好評のうちに終えた。

福島区長の挨拶や大開幼稚園児の花束贈呈、また下福島中学校生のプラスチックバンドが花を添えてくれた。

今後とも、機会があれば歴史研究会としてできる事があれば、松下幸之助翁の偉業のPR等を企画したい。



国道二号淀川大橋改修工事の見学と

海老江の歴史 末廣 訂

見学日 平成三〇年四月二〇日(金)

午前一〇時～一一時半ごろ

参加人員 一一名

一 はじめに

当日は久しぶりに雲一つない快晴で、絶好の見学日となった。午前
一〇時前に会員は工事事務所(国土交通省近畿地方整備局 大阪国道
事務所から請け負った「国道2号淀川大橋床版取替他工事IHイン
フラシステム・横河住金ブリッジ特定建設工事共同企業体」のある
旧中津運河沿いのプレハブ事務所に集まった。

この見学を申し込んだのは、総勢一一名(二名は太田事務所員)で、
本会員である太田晶也市会議員の呼びかけが契機であった。(議員
から大谷区長のすすめがあったので呼びかけたとのこと)

事務所内は会議室になっており、テーブルに、ヘルメットや安全ベ
ルト・反射チョッキが置いてあり、前方には、プロジェクター・スク
リーンが準備されていた。担当の方にお聞きすると、今まで約四〇団
体が見学に来たとのこと。

見学の安全対策として、保険に加入することと、事前に太田事
務所から我々の氏名等は提出済みである。

手元に説明資料が準備され、担当の方からプロジェクターを使いな

がら説明をいただいた。内容は「淀川大橋の概要、橋の構造、淀川大
橋の歴史(西成大橋から淀川大橋へ、鉄道と併用橋、大阪大空襲によ
る被害)そして老朽化の現状と工事内容、床版取替工事、工事の日程」
等詳しく説明があった。専門用語もあったが、写真等もあり理解しや
すかった。

この大改修工事は約三年かけ、二〇二〇年三月までかかる工事とい
うものである。約三〇分の説明後、見学の準備として、テーブルにあ
る反射チョッキ、ヘルメット等を各自着用した。

二 いよいよ工事現場の見学へ

工事事務所から現場まで約百メートル、重装備の姿で一列に並んで
歩き、大橋の袂(下流側の現場)にたどり着いた。

一歩工事現場に足を入れると、大型の機械や機材がおりてあり、ま
だ舗装ができていない橋道が続いており、右側には交通渋滞の車が見
える。舗装ができていない床版上を一五〇メートルほど歩き、その後、
橋脇の木組みの足場(幅は約一・五メートル)を更に一五〇メートル
ほど進んだ。このあたりになるとほぼ橋の中心部で風が涼しい。ここ
で、案内の人が下に降りる狭い階段の取手を開け、下に降りた。

ここは車や人が通っている下になり、所謂、橋桁の部分で鉄柱がタ
テ斜めに乱立しているのが見える。大橋の工事をはじめから百年近
くたち、床版の損傷、鋼材の腐食、また、コンクリートの剥離や鉄柱
の露出があり、橋の健全度(橋単位)は四段階のレベル三という悪い
状態であると聴いた。

大正末期の大工事だが、まさに大阪は西成郡を大阪市に編入し、人口二百十一万で日本第一位、世界でも六番目の大都市となり、「大大阪」の時代であった。

建設当時、大量の鋼材の国内製造は困難であり、八幡製鉄所、神戸製鉄所の他、アメリカやイギリスから鋼材を運んできたという刻印が確認されている。当時は丁度関東大震災（大正一二年）の直後で、のちに阪神電鉄の路面電車が走る等、地震に強い橋梁の施工が要求されていた。

大変驚いたのは、先の大戦で数回にわたり米軍機の爆撃機による攻撃で、被害を受けた痕跡が残っていたことである。いわゆる戦闘機に



○印が痕跡



工事中の淀川大橋

よる機銃掃射により銃弾が鉄柱を貫通した銃弾の痕跡が数か所あり、空襲の激しさを今に伝えている

橋桁の見学後、上にあがって全員で記念写真を撮った。また、我々が地元の歴史研究会という団体であるからか、工事担当者から記念として弾痕跡が残っている橋脚部分を約七〇センチ四方（約九〇キロの重さ）に切り取り、寄贈してもよいと提案があり、一旦、太田事務所に預かってもらった。

五月一七日・月例会の日に、海老江の太田事務所から切り取った鉄柱の一部を台車に乗せて、太田議員と秘書の方で福島図書館に運んでもらい、資料室の蔵屋敷石碑の横に展示をした。（是非見てほしい）

この見学会は三月に海老江西小学校に通う孫娘が「今日は学校から淀川大橋工事の見学をした」ときいて、自分も見学したく思っていた。歴史研究会で見学でき、大変うれしく思っている。



弾痕跡の鉄柱の一部
（福島図書館資料展示室に設置）

区役所5階にも一部展示

三、淀川と地元海老江の歴史

我が家に「淀川大橋開通
記念・大正一五年八月二五
日」の刻印がある直径一五
〜六センチの丸い鉄製の記
念皿がある。祖父が竣工初
渡り記念式典に参列した時
の記念品ときいている。



海老江町・野里町・
鼻川町の連名

淀川や中津川は大阪の人々の日常生活を大いに潤していたが、その反面、度重なる水害によって人々を苦しめてきた。特に明治一八年（一八八五）の大雨による大洪水の被害が大きく、枚方で堤防が決壊し、大阪市内では一万四千戸が流失し、死者も出た。

のちに治水翁と称賛された放出の大橋房太郎氏が政府に働きかけ、明治二九年に河川工事を国が行うという河川法が成立した。そして当時蛇のように曲がりくねっていた中津川を毛馬辺りからまっすぐ大阪湾に流すという大治水工事が三一年から始まった。

ところが、この工事により、当時の海老江村の土地六五%（九〇町歩・甲子園球場・二五倍）が川底になり、しかも海老江新家（現西淀川区花川）は分断されてしまった。現在でも花川に海老江の南桂寺の檀家が数十軒あり、お参りに来られている。

海老江村の墓は移転し、現在では服部緑地公園内にある。「野田福島の戦い」で織田方の陣営だった「海老江城（砦）」址は川底になった。しかも当時農業が主体だった海老江の農家の田畑も川底になって

しまった。

新淀川の掘削で出た土砂を運ぶため、中津運河が大河に並行してできた。土砂は当時の井路川を通じて、梅田付近、大開や海老江にあった川や池を埋め立て、そこに新しい住宅（主に長屋）や工場が建ち、どんどん人が移り住み、新しい街ができてきた。淀川の土砂を運んだ中津運河は昭和になって埋め立てられ、新しく淀川左岸線の高速道路の予定地になっている。新淀川の治水工事を記念して海老江八坂神社裏の海老江中公園に「疏河紀恩之碑」が建っている。



明治三七年生まれである父親から子供の頃、淀川の土手工事が続いており、「モッコ」を担いだ工事人が土手を行ったり来たりしていた話を聞いたことがある。

その後、新淀川に有料の橋がかげられ、「淀川の 銭取り橋や 寒習い」と詠んだ松瀬青々の句が残っている（海老江の住民は通行料タダであった）。そして明治末に当時西成郡で一番大きな橋、西成大橋が完成した。現在その「西成大橋」の親柱が海老江八坂神社と花川の鼻川神社の境内に残っている。大正末に、西成大橋の上流側に並行して、現在の淀川大橋が建設されることになった。

今では淀川河川敷に子供の遊び場や野球やサッカー・テニス場ができ、天気の良い日は、バーベキューを楽しむ家族や団体が見られる。また、河川敷から見る夕日は格別である。



上左 八坂神社の親柱
上右 鼻川神社の親柱
下 西成大橋

四、銃弾痕がある鉄柱の提供を受け、当会から感謝状

その後、六月二十七日の午前、宮本事務局長と二人で工事事務所において歴史研からの感謝状を贈った。これは先方からいただいた部材を展示し、戦争の被災を広く知っていただくよい機会となり、何か工事事務所のご苦勞にお礼をしたいと思っていたが、先方からそれでは「感謝状」をできたらいただきたいと話が出て、授与することとなった。

また、先方の大阪国道事務所のHPに展示等の記事が掲載されている。
<http://www.kkr.mlit.go.jp/osaka/kanri/yodogawa/photo.html>

今回、淀川大橋の改修工事の見学に参加でき、親から聞いた話や街の変化、また先の大戦で一トン爆弾が我が家の前に落ちたこと思い出した。

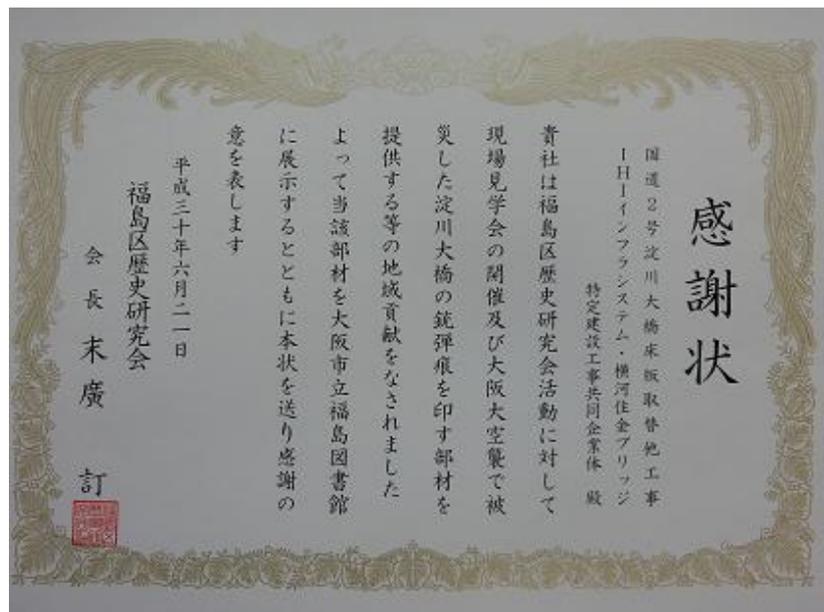
先の大戦で、昭和二〇年六月二六日に海老江地区に落ちた数発の一トン爆弾のうち、一発が淀川大橋の中央・上流側の橋桁に落ち、その痕跡が残っているのか、次回の見学が楽しみである。



平和の碑

(海老江8丁目)

6月26日の死者を悼んで1973年に建立された



浦江マチ歩きの栞

—平成三〇年第一回

福島区歴史研究会セミナー報告—

西 保國

日時 平成三〇年三月三十一日(土) 午後二時から四時

会場 福島区民センター 三〇一号室

テーマ 浦江マチ歩きの栞—鷺洲界隈の再発見—

講師 田野 登氏(大阪民俗学研究会代表、当会会員)

参加者 三三名

今は地名として消えてしまっている浦江の地を巡るマチ案内のお話である。かつての浦江の南部(以下「南浦江」)は現在の鷺洲界隈に当たる。昔からの住民にとって浦江の名前は懐かしく心に響くらしい。講師の生まれと育ちもこの地にあるという。個人の思いも込めつつ、今ではその名が失われてしまった浦江の今と昔、またそのレガシイ(伝説)についてたっぷり九〇分語っていただいた。

一、「鷺洲」を巡る

話の始めは、地域の概要紹介である。パワーポイントにより、南浦

江に当たる鷺洲界隈の今と昔を地図、写真、図画等を駆使して紹介くださった。本セミナーのため講師自ら撮られた写真を含め、資料は多岐、多数に渡る。その主な内容は、JR福島駅・浄正橋商店街界隈や聖天通り商店街の新旧の様子、今はなき妙徳寺(五百羅漢)や結婚式場「クラレ白鷺」の姿、そして鷺洲中公園の昔の様子等々である。懐かしい写真が投影される度に参加者からため息が漏れた。

二、「浦江」を探る

公的な地名からは消えた浦江であるが、今その名はすべてなくなっているのだろうか。その名を求めて講師は鷺洲界隈をいろいろ探索してみる。その結果、浦江の名は了徳院に係る駅の観光案内図、公園の名前、社社の通称など、ごくわずかなところにしか見いだせなかったという。

三、「浦江」と「鷺洲」を解く

かつての浦江は村として存していたが、明治三二年(一八八九)の市町村制の発足により大仁村、海老江村、塚本村と統合され、新たに鷺洲村として発足した。浦江は当初鷺洲村の大字の名として生き残ったものの、その後地名としての地位を完全に失った。

なお、鷺洲村は後に鷺洲町へと昇格するが、「さぎす」と初めて呼称されるようになるのは、昭和一八年の福島区成立後の昭和一九年一月一日以降のことで、その際は「福島区鷺洲中一丁目」といった具合

に丁目に冠する町名としてである。ちなみに学校名の「大阪市立鷺洲小学校」は、明治三十一年に創立した「鷺洲尋常小学校」の後身で、創立当初から「さぎす」を呼称していたことは、現在も歌い継がれている校歌の歌詞に「さぎす」と歌うことから推察する。

四、浦江名所を遡る

地名からは消えてしまった浦江だが、浦江にまつわるレガシイ（伝説）が巷間伝えられている。その内容、いきさつは次のようである。

○大阪近郊の名所伝承

浦江は井路川に囲まれた水郷であった。同地の了徳院、妙壽寺は、蓮華や杜若、また藤、桜、萩の名所であったという。しかし、既に昭和初期には工場の煤煙、汚水により花はかつての色を失いつつあったことが報告されている。平成には名物蓮飯を供していた料亭も閉じて、かつての名所も伝承としてのみ残ることとなった。

○了徳院の杜若塚伝承

了徳院には松尾芭蕉の「杜若語るも旅の一人かな」の句碑がある。この句碑により、芭蕉がこの地を訪れて先の句を詠んだという言説が生まれた。実際はそうでないとの事であるが、講師は、著書『水都大阪の民俗誌』和泉書院、二〇〇七年刊）でその詳細を検証されている。

○高田屋嘉兵衛靈譚伝承

江戸後期の大海商高田屋嘉兵衛が浦江村歓喜天に日参した可能性に言及された。

五、「田蓑島」を想う

難波八十島の一つで歌枕として有名な「田蓑島」がどこにあったかという話題である。講師は長年このテーマに取り組んでこられたという。文久三年（一八六三）の絵地図に南浦江の田地に「古田蓑島」の表記があるのだが、比定する確実な証拠はないらしい。今となれば、田蓑島は、和歌の美的世界の中に歌枕として存在しているのではないだろうかとも話された。極めて専門的な内容で、詳細は講師のブログ「晴耕雨読」に掲載されている。<https://ameblo.jp/tanohoboru/>



「モーリーJAPAN #1、水の都大阪」に 田野会員出演

四月二日、関西テレビの番組に大阪民俗学研究会代表として登場。
大川周辺の歴史などを舟に乗って案内されました。



野田福島の戦いとその意義

—平成三〇年第二回

福島区歴史研究会セミナー報告—

服部静尚

日時 平成三〇年七月二十八日(土) 午後二時～四時半

会場 福島区民センター三〇一号室

テーマ 野田福島の戦いとその意義—信長の前に立ちほだ

かった三好一族—

講師 天野忠幸氏(天理大学准教授)

参加者 六二名

これはおもしろい。やはり歴史はおもしろい。今回天野先生の講演を聴かれた人はこう思ったに違いない。TVドラマで見たのと違う織田信長、足利義昭がそこに居て、わがふるさと野田福島がなぜ天下を分ける戦いの舞台になったのか、三好長慶・三好三人衆ってこうだったのかが語られた。次に講演の一端を報告する。

(一) 天下人と言うと、日本全国を支配したと思いがちだが、当時のポルトガル人が作った日本語辞典『日葡辞書』によると、京都・大阪・奈良の範囲だったのだ。戦国時代、はじめての天下人は三好長慶で、次の織田信長は、天正八年(一五八〇)に大坂本願寺を上町

台地から退去させやっとな下人になった。(そして二年後、本能寺の変で亡くなる。)

(二) 家柄・権威が大義、下克上の戦国時代もそうであって、全ての新興勢力は足利將軍の元に支配権力を握った。(信長の天下布武も元々幕府再興の意味だった。) そんなくびきをはずし、はじめて將軍を擁せずに、芥川山城(高槻市)・飯盛山城(大東市および四條畷市)を本拠に、天下人となったのが三好長慶だった。キリスト教・鉄砲など西洋文化を取り入れたのも長慶だった。その長慶が永禄七年(一五六四)四二歳の若さで亡くなる。

(三) 後を継いだ三好義継の失政で内紛が起き、最終的に元龜元年(一五七〇)に野田福島の戦いが起きる。

野田福島に陣取る、三好三人衆・細川信良・雑賀孫一これに本願寺も参戦(前関白近衛前久・島津貴久の支援も)。

片や、足利義昭・信長・三好義継・松永久秀の連合軍。不利を悟った信長は、正親町天皇などの斡旋で和睦する。三好三人衆・本願寺の勝利だったのだ。(信長はその後、浅井長政との戦いに注力する。)

(四) 勝利した三好勢が、その後、有力大名の死・阿波三好家の内紛没落などがあって力を失う。天下を制した三好家も内から脆くも崩れ去ったのだ。その後の信長の攻勢によって、天正八年(一五八〇)大坂本願寺は講和し大坂を退去した。

(五) ところで、なぜ野田福島だったのか、その理由は『細川両家記』



天野先生の講演での語り
は、広範囲に古文書を漁り、
解読した、その研究量を彷彿
とさせ、聴く者の心に響
くものでした。

に、次のように書かれている。
「或る人が言うには、摂州の中嶋の内、野田福嶋という所が
あって、西は大海（大阪湾）で、淡路および西国へ舟で自由
に往来できる。北南東には、淀川があって、里の周りは沼田
だ（敵が攻め込み難い）。こんな（陣取るに最適な）所は希
である。」
わがふるさととは、こういう所だったのだ。今まで語られなかった歴
史が野田福嶋にあったのだ。



福島区歴史研究会 会則

（名称及び組織）

第1条 この会は「福島区歴史研究会」と称し、郷土の歴史を愛好する者をもって組織する。

（目的）

第2条 この会は歴史を学ぶ事を通じて、私たちの身の回りの過去と現在、そして未来の郷土を考
える事を目的とした歴史愛好家の「広場」である。

（事業）

第3条 この会は前条の目的達成のため、次の事業を行う。

- 〔1〕 郷土福島区の歴史と史跡の研究
- 〔2〕 資料の収集と調査
- 〔3〕 史跡・文化財などの見学
- 〔4〕 活動の成果の発表及び記録の作成
- 〔5〕 この会の目的のために必要な事業

（役員）

第4条 この会に次の役員を置く。任期は2年とする。但し、再任を妨げない。

会長・副会長・幹事長・会計・会計監査・顧問・幹事

なお、事情により任期務途中での交替がある時は、後任者の任期は前任者の残りの期
間とする。

(役員職務)

- 第5条 [1] 会長はこの会を代表し、会務を統括する。
[2] 副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときはその会務を代行する。
[3] 役員は年間計画の立案、この会の円滑な運営のための諸事業を企画及び実行する。
[4] 幹事長はこの会の会務全般を処理する。
[5] 会計はこの会の経理を統括し、総会で年間の収支を報告する。
[6] 会計監査は経理を厳正に監理・監査する。

(総会及び役員会)

- 第6条 [1] 総会は年1回以上開催し、会長が座長をつとめる。役員を選出、会全体の活動方針や重要事項の報告・確認を行う。総会は会員の半数以上の出席で成立し、出席者の過半数の賛同により、総会の決議事項とする。
[2] 役員会は年1回以上開催し、重要な方針変更、予算、計画立案等協議する。役員半数以上の出席により成立し、出席者の過半数の賛同により、役員会の決議事項とする。なお、他の会員、専門家の出席を求めることができる。

(事務局及び事務局長)

- 第7条 本会の事業を円滑に行うために事務局を置く。幹事長は事務局長を兼務し、会議の準備及び議事録の作成、会員名簿の管理、会員相互の連絡、広報及び活動記録の作成などを行う。事務局は事務局長宅内に置く。

(企画会議)

- 第8条 事務局長は総会、役員会で決定した事業の具体的実現のため企画会議を主催する。企画会議には会員及び関係者が出席できる。また、必要に応じて細目を検討するため事務局長のもとに部会を設けることができる。

(会費及び会計年度)

- 第9条 この会の経費は会費(年額3000円)及び賛助金などをもってあてる。
会計年度は1月1日より12月31日までとする。
なお、1年を超えて会費を滞納した場合は会員資格を失う。

(実施要綱)

- 第10条 本会の事業の実施について、必要な事項は別に定める。

(その他)

- 第11条 [1] この会での活動により得られた情報、成果はこの会に帰属する。
[2] 会員が死亡した時は、シキビまたはこれに替わるもので弔意を表す。

付則 この会則は平成21年2月22日より施行する。

平成24年2月18日一部改正

福島区歴史研究会 役員名簿 平成30年2月総会選出

会 長	末 廣
副会長	藤
幹事長	宮本 (事務局長兼務)
会 計	大平 (雄)・大平 (幸)
会計監査	福原・林
顧 問	岡倉・長山
幹 事	水谷 (事務局次長)・大垣・荻田・武田・多田・西・西田・西村・服部

福島区歴史研究会 2018年上半期の事業

セミナー「浦江のまち歩きの家」講師・田野登氏 3.31 会場・福島区民センター

展示「区の花 のだふじの今昔」2017.10.10～2018.4.27 会場・福島区役所

展示「道は続くー松下幸之助創業100年ー」3.13～6.30 会場・福島図書館



藤家十八代藤三郎さん
毎日放送VOICEに出演
当会副会長の藤さんが四月一八
日、春日神社で区の花「野田藤」
を説明されました。
毎年、藤の季節になると。テレ
ビやラジオにひっぱりどころです。

2018年 上半期の活動記録

- 1.18 企画会議
- 2.15 役員会・企画会議
- 2.18 総会・懇親会
- 3月 『「福島村」小さな小さな歴史まち歩き』（大垣・荻田・森本会員編集
福島連合振興町会刊行）
- 3.9 展示準備（図書館）
- 3.15 企画会議
- 3.31 懇親会
- 4.5 パナソニックミュージアム見学会
- 4.19 企画会議
- 4.20 淀川大橋改修工事見学
- 5.11 展示替（区役所）
- 5.17 企画会議
- 6.21 企画会議

浦江塾（協力）2.3 3.3 4.7 5.5 6.2

ホームページ <http://o-fukushima.com/rekishi/top.htm>

（会報バックナンバーも掲載）

（印刷：谷口印刷紙業）